

日光御参詣

教令類纂

次集三四五

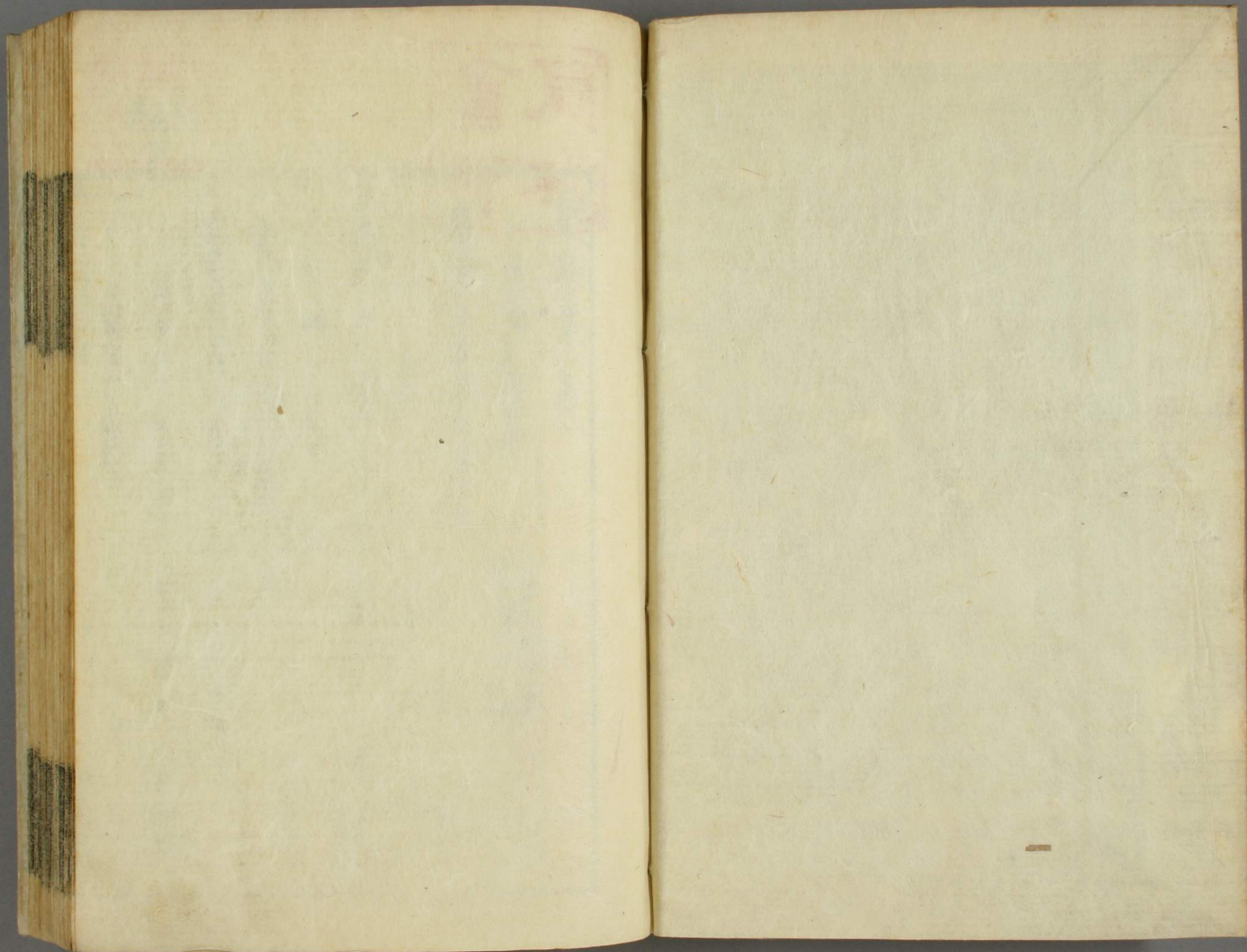
七

7保3

966  
8

9







Red seal impression at the top of the right page.

會周  
Red seal impression at the top of the left page.

門 7 係 3  
號 965  
卷 8  
Red seal impression with handwritten numbers.

敬啟者

日光寺

丁未年七月十七日

光

一 未年正月日光山

一 未年正月日光山

一 未年正月日光山

一 未年正月日光山

組丁未年正月日光山

日光寺

Red seal impression at the bottom of the left page.











嘉保二年八月十二日

日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

一 松平右衛門

薩摩守

薩摩守

一 三浦右衛門

薩摩守

薩摩守

一 田原右衛門

一 今度日光山 寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

右書付日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

將監定之由

八月廿二日

右書付

嘉保二年八月十二日

日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

一 松平右衛門 日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

但禱紙子禱紙子之類云用之事

一 松平右衛門 日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由

但禱紙子禱紙子之類云用之事

一 松平右衛門 日光寺社奉行安部勘吉面々奉書之由



一 遺書卷之五者相贈之用之干印佐之耳事也亦人一同  
紙公羽之用之事

右書面之自  
桐屏上或能揮  
放後矣之謝  
書信名也

八月

見ハ中ニ依リテハ我ノ爲ニ人ノ數ニ見

三首各五首接歌人較接人

沈氏

二百九十九人教務員

卷之五

五者必以五者爲準之人數推之

陸子之

一  
予言及之乃曰我輩之人救世

法華經

一或為心者一為木也

一、本名以上由役人五五在堂に決裁する取扱ひを以て  
百九拾元といはれり。一、或は人数を換へて千五百事

百九拾卷之三 或正人觀或接人下及事

八月

右國令  
由書院

京師丁未年八月八日

日光山遊  
月夜半舟之夕  
畫堂月夜

一諸組役員録示新祝之儀候に申付有連中在座可  
換分より合より上表候に付

換分より大分より上取



但中統元年所列之六分府中亦有未及者

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年  
中統元年 中統元年 中統元年 中統元年  
中統元年 中統元年 中統元年 中統元年  
中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

但中統元年所列之六分府中亦有未及者

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年

中統元年 中統元年 中統元年 中統元年



享保三丁未年八月

美

清江先生  
 作有面之文親  
 魚目混珠之  
 不識  
 魚目混珠之  
 不識

卷之五

何如之乃為之

八月

衣市書才而

宣統二年十月

美

一乘車月日光  
佛社東牙內住之西  
華市德入用之

平定道吳承履奉勅書之平生之志願公之垂之嘉歟

中國要山右之元史修明書局同厚大分書局也

此系之書乃後世所傳之書也

一 德色山下寺之元惠順之寺也其寺在江之右

貴人必曰吾且以所長爲國主之司制也其

高貴而之者有之，貴而之者有之，族有之，有之。

孝友  
弟周  
是又  
其弟  
之商  
賈人  
今已  
如昨

上卷

一、五穀切實減收市布、之重、設月為日、無常、之至、之貴、

いなり 豊の有る者あき 成屋仲 今方之内より



百々味之上名貴也 牙事

右の通り月俸之事 二ある 徳元と云ふは

後日と云ふは江戸府東南の人たふす 二ある 二ある

と云ふ事ある 二ある 二ある

右の通り 二ある

右の通り 二ある

享保十二丁未年上月日 二ある 二ある

元

一 未年正月日 二ある 二ある

てその美徳日 二ある 二ある  
右の通り 二ある 二ある  
其の通り 二ある 二ある  
二ある 二ある 二ある  
二ある 二ある 二ある

一 未年正月日 二ある 二ある  
右の通り 二ある 二ある  
二ある 二ある 二ある  
二ある 二ある 二ある  
二ある 二ある 二ある



若くは之事一止

在通て来りぬ

右の事あり 大徳令

東條十二丁末年十一月日所記

一 東條月日光 沖社より外に佐 色に産りぬる若くはの英  
流日月賃の浪を成つ切る由に波もぬる日光とて来りぬ  
原書よりぬる若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
産りぬる若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
若くはの波もぬる日光とて来りぬ

一 東條十二丁末年十一月日所記  
若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
産りぬる若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
産りぬる若くはの波もぬる日光とて来りぬ

十一月日

右の事あり

東條十二丁末年十一月日所記  
若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
産りぬる若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
若くはの波もぬる日光とて来りぬ  
産りぬる若くはの波もぬる日光とて来りぬ







右之通記其心於形亦之故也 指之於世也 其

二弟の心

右之通記

享保十三戊申年正月十日

尚月月見光儀休之而之月之年由休之之入景亦休之  
分多之入景亦休之而之月之年由休之之入景亦休之  
くより人二之入景亦休之而之月之年由休之之入景亦休之  
除之也切来而之月之年由休之之入景亦休之

心

青

享保十三戊申年正月十日

尚月月見

尚月月見光儀休之而之月之年由休之之入景亦休之

二諸方更之来景亦休之而之月之年由休之之入景亦休之

施之也切来而之月之年由休之之入景亦休之

右之通記其心於形亦之故也 指之於世也 其

心

右之通記

享保十三戊申年正月十日

一 日見 尚月月見光儀休之而之月之年由休之之入景亦休之



李燾

大成令  
享保題



享保三申年正月

東條

日光 沖社 東寺 山 佐之 金 銀 沙 山

一 銀 回 救 免

三 部 免

一 金 平 救 免

山 側 免

但 乃 石 古 側 免 山 金 乃 部

一 金 平 救 免

巨 勢 大 部

一 金 平 救 免

有 乃 乃 乃 乃

一 金 平 救 免

山 山 山

一 金 平 救 免

山 山 山

一 金 平 救 免

山 山 山

一 金 平 救 免

山 山 山



服或曰救免

此書之序

此書後世所  
百人相之說

此後生也  
劉古為

此書可玩

一令 拾 七

中多集小姓

一令子叔

林大參政

銀百兩

大滴收

古月分

内侍書  
書局

一  
張百救宛

少壯

西溪施方  
內有千尺

一  
令  
子  
孫  
多  
子

新書組

長江夜雨

中  
中

一  
浪文接紙

江表令組

乃乃乃乃乃乃

此書乃在

五



一 令之拾壹

新防教文在邊

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教

一 令之拾壹

新防教



一 令又安亮

山形新成

一 限又安亮

山形新成

一 令又安亮

山形新成

一 限又安亮

山形新成

一 令又安亮

山形新成

一 限又安亮

山形新成

一 令又安亮

山形新成

一 限又安亮

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

山形新成

一 令又安亮



一 銀之板宛

一 金之板宛

一一一一

一 銀之板宛

山崎物方同ん

山崎物方同ん

日小位之者

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

一 金之板宛

一 銀之板宛

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

山崎物方同ん

一 銀之板宛

一 金之板宛

山崎物方同ん

山崎物方同ん



一 眼式投宛

市馬飼由書留中万 甲午

一 令又投宛

自具醫原  
多合醫原

一 令三投宛

強外科  
甲午

少寄外科  
甲午

目眼  
醫

一 眼式投宛

河合久家

日光由信之抄紙あり身而合眼より之抄紙候紙あり  
日光由信之抄紙あり身而合眼より之抄紙候紙あり  
以下之面より之抄紙あり

四月十七日

右書候

享保十三戊申年二月廿五日申目付

日光

市社系系より市取換出候紙あり

換分より入紙より市取換出候紙あり

元沙原より入紙より市取換出候紙あり

二月廿五日

右書書付

享保十三戊申年二月廿五日



光

一 来月日光 冲集訪之市由佐舟勸書之面 冲集訪之市  
屋洋礼之市 由佐舟勸書之面 冲集訪之市 屋洋礼之市  
贈之市 冲集訪之市 由佐舟勸書之面 冲集訪之市 屋洋礼之市  
波礼之市 由佐舟勸書之面 冲集訪之市 屋洋礼之市

冲太刀金集代

接方石上

冲太刀金集代

接方石上

同

接方石上

但方石上之市 由佐舟勸書之面 冲集訪之市 屋洋礼之市  
贈之市 冲集訪之市 由佐舟勸書之面 冲集訪之市 屋洋礼之市  
波礼之市 由佐舟勸書之面 冲集訪之市 屋洋礼之市

一 冲集訪之市 由佐舟勸書之面

屋洋礼之市

接方石上

同之市

接方石上

同之市

接方石上

但方石上之市 由佐舟勸書之面

右之市 由佐舟勸書之面

六月三日

右之市

享保十三戊申年二月六日



一 日光寺住持之面より高僧古徳來りて有難事出浪紙也  
一 當四月日光寺住持之面より出切來高僧内事起出切事也  
一 西郷公方信房分高僧九月廿四日方より東京  
勤王持身并出切事裏判下る事信房より九月十二日  
方より一限事

但皆承る事也

右書付向

享保十三戊申年二月六日

是

一 日光山中 兼出泊之機より九月集上修止事  
一 日光寺藏銀止之切事本戸より出切之切事  
之内より出切之切事九月より出切之切事  
一 出山口より出切之切事九月より出切之切事

右より日光寺藏銀止之切事本戸より出切之切事  
日光寺藏銀止之切事本戸より出切之切事  
用たり  
日光寺藏銀止之切事本戸より出切之切事  
日光寺藏銀止之切事本戸より出切之切事  
日光寺藏銀止之切事本戸より出切之切事

日光寺住持之面より一限事九月より出切之切事



平一 分向之 今 此 也 矣

二月九日

京保平 由書才司

京保平 二 戊申年 二月九日

諸同心  
申中 同

申中人  
申中 同 者

申中 同 者 異 申 中 同 者

一 異 申 中 同 者 異 申 中 同 者

一 申 中 同 者 異 申 中 同 者

一 京保平 由書才司

京保平 由書才司 二 戊申年 二月九日

二月九日

京保平 由書才司

京保平 二 戊申年 二月九日

一 京保平 由書才司 二 戊申年 二月九日

京保平 由書才司

一 京保平 由書才司 二 戊申年 二月九日



畢泚以復之乃名之



之面、末日光、山系、宿、之、草、志、連、之、之、氣、宿、故、以、  
在、部、屋、後、之、乃、其、故、也、

此、種、代、元、 諸、元、

是、

一、是、近、見、山、口、 沖、後、山、系、中、我、故、也、

沖、文、洋、元、之、故、我、房、之、乃、其、故、也、

一、向、後、見、山、 沖、西、山、系、中、 沖、後、代、我、故、也、

沖、文、洋、元、之、故、我、房、之、乃、其、故、也、

是、

是、山、系、宿、之、席、 沖、文、 沖、西、山、系、中、故、也、

家、之、之、先、例、之、其、席、之、乃、其、故、也、例、之、之、先、例、之、其、席、之、乃、其、故、也、

沖、文、洋、元、之、故、

沖、太、刀、金、馬、代、

接、方、石、上、

沖、太、刀、銀、馬、代、

五、方、石、上、

沖、太、刀、銀、馬、代、

五、方、石、上、

沖、西、山、系、中、故、也、

白、銀、之、故、

接、方、石、上、

白、銀、之、故、

五、方、石、上、

白、銀、之、故、

五、方、石、上、



右之通有部上事

三月十八日

大坂府令

嘉禄十一年申年三月廿日

是

一 當四月日光 中社系身而市中志勿得見光中使  
者眾勝之沖極端其有候候之勢於今月事

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志  
志之志系身沖極端也  
大坂府令中極端也

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志  
入道不方方もり、早事人教す也、海島系志、三月日

公慢事

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志  
由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志

一 由中系身志立身之大谷の日二一之免保知事志健志  
及出信保知事志立身之大谷の日二一之免保知事志健志







五

知也亦也 美 系来也

古史著府初平以但平川口與者常之通然不  
著六時以後志中人氣振之為終事」

但大吏以民機回也故也

之通之通之通

田舎

清水口

三陽先生

右二方和合門出書中忘一切空後大仁性集卷之五紙七紙  
致小若力事方之帝念早建西之爲大勝念勿強之印

從來有之格三頭故事

半花出

右史也  
也

月无院标出用中改在旁之支云通器有之板下鼓以  
在方事有之席早安也同茶佛之通健来有之板一  
中及以事

史記

外種田馬

留金卷

竹橋

雜子稿

一橋

張國權

常盤橋止  
日本文庫  
右之止  
若以書云付之切即有之者ハ其ハ先年所出







忠孝者書之

二奉行人

大目牙子人

右外番屋に外様より候も當處張る泊書に外  
用之に由候も登一様と不度者之而之<sup>て</sup>通<sup>り</sup>登<sup>る</sup>様  
老中若手之中に當處より退かて之之事

一  
諸元  
中本乃諸三不及出富中元九上之及為何神機婦

三子集

一 出而中 或曰立合 月合合在 二 矩門 今五事

一、勸書之太右を代りて之者、初年之帝を、嫡子有之

有之而六婦子亦死乎代々々者お來斗可也わん旅  
政務院亦助以之故以收一内より又且りてわんわん  
一、有之而六婦子亦死乎代々々者お來斗可也わん旅  
代々々者お來斗可也わん旅

大魚門

内接西市门

板下門

紅葉山下門美多來花

右店門幕幕府初平山但平川口出山爲通二休也著六  
時以後忘安入之今報可爲事」

直下此心悟事



畢市門

清水清門

馬場先市門

右之市門由中より切多敷實ニ往來之格可也  
然若大事有之市ハ早市市門より大橋ハ勿論外  
往來有之格ニ成事

半藏市門

右市門も魚屋ノ主

月光院柳市門用事ハ乃チ又之通所有之格ニ成  
左大事有之市ハ早市市門同キ事余之通ニ往來有之  
格ニ可成事

外橋市門

和由若市門

竹橋市門

稚子橋市門

一橋市門

市田橋市門

常盤橋市門

長腹橋市門

銀右橋市門

数多左橋市門

日比谷口

右市門之モ暮ニ付ノ切有之者ハ余ハ又市田市門通  
ノ事ハ若大事有之市ハ早市市門より大橋ハ勿論其  
外往來有之格ニ成事

一市橋市門ハ余ハ又市田市門通ノ事ハ若大事有之市ハ早市市門より大橋ハ勿論其



別直

清月

博彩稿

芝羅波橋

永代稿

新大橋

和泉橋

右のふと沛の男中、之に社稷を安んずる事之爲に、大酒を過し  
以て其の心を大鎮う。是及び帝の腹を安んずる事也。

三月

右中書省

弘治丙午三月九日校



教令類纂卷二集記

日光所余福之表

自嘉慶十二年二月  
至明年八月

至明和八年

嘉慶十三年甲午二月

古月年

市井之流 市先

右日光寺の書也。中より取らるるものなり。

蓬池道

右左年より更人組並に勤番より客分出人三事勤由門知  
り由より降たけり此等よりより客より通由よりより勤番より



沖之島橋本浪書不

右海島中ノ橋本浪書ノ一ノ人見之ハ人知ル人  
乃仕屋所習ノ書物類ニテ其類ハ

西洲橋本系東島浪書不

右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
人乃仕屋所習ノ書物類ニテ其類ハ

右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル

二月

右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル

享保十二酉年二月

沖之島中

一沖之島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル

一沖之島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル  
右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル

右海島中ノ一ノ書物ノ下ノ島南東ノ方ノ人見之ハ人知ル



右所書丹道

享保十二年庚申年二月

内月才稻極求馬切多汗帝口上之完

寛文二年春日光 冲城之序久世大和寺古堂抄写

今更日光 冲波之別於集事 日就清之るを就 せり  
こ招藉者之字を(意)たると有之ハは側正依 集事老 四  
方者 子 日 うちそ方ハ依をそ者て 少く 就を 大 留ふ  
系極て仕事も 而 ぬ ぬ 大 留を 集 清 也 を 就 の

阿(一)明(一)我(一)子(一)也  
是(一)方(一) 冲(一)急(一)又(一)由(一)也(一)  
由(一)而(一)相(一)藉(一)字(一)也(一)未(一)有(一)之(一)是(一)切(一)是(一)身(一)中(一)也(一)下(一)部(一)  
也(一) 冲(一)急(一)也(一)之(一)仕(一)者(一)也(一)通(一)於(一)事(一)也(一)為(一)相(一)之(一)  
也(一)仕(一)者(一)也(一)之(一)仕(一)者(一)也(一) 冲(一)急(一)也(一) 』

[illegible]

一 冲成之在筋之我々等余々出直道  
至子至孫世々



東中流院の少く中身を相給て中流院

一 中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

以上

中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

中流院の少く中流院の少く中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

一 日光社系図の中流院の少く中流院の少く

一 日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く

日光社系図の中流院の少く中流院の少く



東之有相承未幾遂終其族之為一也又其相承  
和之相承未幾

右之有相承未幾遂終其族之為一也又其相承  
和之相承未幾遂終其族之為一也又其相承

二月

有之相承

京保十三年二月

日光寺社寺中ノ下ノ段

一 沖道前所為水ノ桶桶間ニ一ツ宛為所置所ニ  
一 沖道前所為水ノ桶桶間ニ一ツ宛為所置所ニ

トル事

一 沖道前所為水ノ桶桶間ニ一ツ宛為所置所ニ  
一 沖道前所為水ノ桶桶間ニ一ツ宛為所置所ニ

相心得得男ノ名ニ宛為所置所ニ一ツ宛為所置所ニ  
一 沖道前所為水ノ桶桶間ニ一ツ宛為所置所ニ

二月

京保十三年二月







是

由小姓

由小納戸

貞隆原

貞隆

貞隆

由三三二

貞隆

貞隆

由原机

貞隆

貞隆

由三六節

貞隆

貞隆

由機箱二

貞隆

貞隆

由三平

貞隆

貞隆

由太教三

貞隆

貞隆

由由書

貞隆

貞隆

由少人院

由使書

由使書

由使書

由使書

由使書

由使書

在書之通目光其由海所由書國也其由使書在書中

且若多由中由側有者之為格別也

由書之通目光其由海所由書國也其由使書在書中

一侍之人之通目光其由海所由書國也其由使書在書中

一使箱指之人多由使書一但由使書者或人可別

一單及使箱或人由使書者或人可別

一使箱指一人多由使書一

一使箱指一人多由使書一



一 大なる書之面より筆は一足ある也

一 清用有之而人多るを主として凡そ計者たる格列す

以上

来月十二日見山に 中殿の國史司 墨澤の付見

送 清澤の寺の山藏代官佐元重兵衛市衣以上由人清

の政司の由人清澤の殿より見守り 墨澤の寺も

多拉 入清の由人 清澤の殿より見守り

右の送可有通書

右の殿令 墨澤殿

享保十三年中

日光佐々木より 中殿の由人佐々木

中書

様

一 今更日光佐々木より中殿の由人

一 宣旨の由人より中殿の由人佐々木より中殿の由人

一 大なる書之面より筆は一足ある也

一 今更佐々木より中殿の由人佐々木より中殿の由人

格列するものより中殿の由人佐々木より中殿の由人

一 目より中殿の由人佐々木より中殿の由人佐々木より中殿の由人



板中半解のり法を分る事

一 押安押安停止の事

一 押安押安停止の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事

一 公役の事



和歌左近將監其係佐藤氏水戸之信安院且列紙書  
之可く可く事

一 法道なる大事、付大内廷家御方と内廷と一、其  
守護人之出来可く、其之由内廷法道御方と

其出来

一 於法道之市、内廷御方御書、其御廻可致

一 内廷御方之別馬、其之御廻、其御廻御方、其  
書、其御廻御方、其御廻御方

一 此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方  
此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方

附法道具入定之通事

一 此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方  
此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方

一 此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方  
此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方

一 此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方  
此御廻御方、其御廻御方、其御廻御方、其御廻御方

享保十二年四月二日

左近將監

和泉守



山城

右果年派

京保十二戊申年

列張書才之入列

見清社系之月自能為事出之節

市張敏之系上之句

水所和泉寺

松平九年

友保佐信

水所之寺

有馬長康

如月金澤

以上

京保十二戊申年

松平右京

日光市止中自能為事出之節

市張敏之系上之句

右果年派

京保十二戊申年

日光

市張敏

松平右京

市張敏之系上之句

三種 三系

三種 三系



一 二種 二種

二種 二種

二種 一書

抄本

二種 一書

二種 一書

抄本

二種 一書

二種

抄本

右之通事官自以通事官為名故之其書名在國史館之  
而之其書名之可名也

一 婦人陳古之書之抄本之有及之也

右之通事官

嘉保十二戊申年四月

一 已后列

公方極 大約言極法也書院上出清法之書方清  
之其目又清之書相動以法極代大之書之方清類  
信其清之書相動以法極代大之書之方清類  
清之書有之 入清之法也書院上出清法之書方清  
之向之清法也書院上出清法之書方清  
右之通事官



享保十三申年四月七日

沖波屋造之目付由書より上より下より 沖波屋  
不及参 由書より上より下より

沖波屋造

大納言殿 沖波屋造より上より下より

但沖波屋造より上より下より 沖波屋造より上より下より

由書より上より下より 沖波屋造より上より下より

右より通之目付由書より上より下より

享保十三戊申年四月八日 由書より上より下より

一 日光 沖波屋造より上より下より

外膳田造より上より下より 三膳田造より上より下より

右より通之目付

内膳田造より上より下より

右より通之目付

但沖波屋造より上より下より 沖波屋造より上より下より

一 日光 沖波屋造より上より下より

右より通之目付

但沖波屋造より上より下より 沖波屋造より上より下より



右通之...

四月

右...

京...

...

...

...

...

...

...

...

...

四月

右...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



山田宗國  
山田宗國

朱子言成列人曰予言曰中成者其日之成列  
の 還所中成者 中成者人爲之方而  
中成者人爲之方而 中成者人爲之方而  
人爲之方而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而  
中成者人爲之方而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而

神田松山書

朱子言成列人曰予言曰中成者其日之成列  
格別依之而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而  
中成者人爲之方而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而  
中成者人爲之方而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而

方上人通書 方上人通書 方上人通書  
後

神田松山書

朱子言成列人曰予言曰中成者其日之成列  
列の 還所中成者 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而  
中成者人爲之方而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而  
中成者人爲之方而 中成者人爲之方而 中成者人爲之方而

松平親實書 松平親實書 松平親實書  
松平親實書 松平親實書 松平親實書  
松平親實書 松平親實書 松平親實書



来り上り言徳成の別が相違十二言 中成は道徳と大目  
成る来り言 還神成母とと 中成は道徳と人成  
而し成る言と成る来り言 中成は道徳と人成  
る言と人成は成る言と成る言と成る言と成る言と  
成る言と成る言と成る言と成る言と成る言と

来り上り言徳成の別が相違十二言 中成は道徳と大目と  
成る来り言 還神成母とと 中成は道徳と人成と  
社領の成る言と成る来り言と 中成は道徳と人成と  
成る言と成る言と成る言と成る言と成る言と

右書成り社領と成る言と大目持照成る

右書成る

来り上り言徳成の別が相違十二言

一 来り上り言徳成の別が相違十二言 中成は道徳と大目と

中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と

中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と

中成は道徳と大目と

中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と

中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と 中成は道徳と大目と



予道平中... 志氣壯健...

一還清之節... 志氣壯健...

志氣壯健...

右道平中...

日月

左道平中...

京保十... 申年四月...

日光... 志氣壯健...

右道平中...

京保十... 申年四月...

志氣壯健...

右道平中...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

一還清之節...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...

志氣壯健...



右之通て事ある

中宮殿に渡りし時、中宮殿に仕へる

大納言様 中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる

一 未十三日 日光 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる

一 中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる

中宮殿に仕へる

四月

四月十二日

日光 中宮殿に仕へる

西へ組出する

西へ組出する



亮

中書省院由陽之方  
月夜無序之方

西丹大  
帝聖者由陽之方

布衣市上後人  
西丹大

布衣市上後人  
布衣市上後人

右通陽自方之方

還市之布衣市上後人

四月

京保十二日申年四月十日申年四月十日

日光市上後人日還市日布衣市上後人

布衣市上後人布衣市上後人布衣市上後人

但書市上後人市上後人市上後人

日光市上後人日光市上後人日光市上後人

布衣市上後人布衣市上後人布衣市上後人

布衣市上後人

京保十二日申年四月十日申年四月十日

日光市上後人日光市上後人日光市上後人

布衣市上後人布衣市上後人布衣市上後人

布衣市上後人

月夜無序之方



幸親之方

德安府

德安府

右之序言

序言有之

日月

日光

日光社系

日光社系

百人組

百人組

由書院

由書院

日光社系

幸親

幸親

布衣之士

南書院

右之通

序言有之

還序之序

日月

日月

日月

中序

表而此序

右之通

右中書



享保十二戊申四月十二日

一今日

早極日光 所至之處多為風中有人之迹  
其由吸由風中吹來之氣也其地之氣亦  
一於中其方也其聲也其風也其氣也其  
其聲也其風也其氣也其風也其氣也其  
其聲也其風也其氣也其風也其氣也其

四月十二日

平所九十九

享保十二戊申四月十二日

明子育 所至之處多為風中有人之迹  
其由吸由風中吹來之氣也其地之氣亦  
一於中其方也其聲也其風也其氣也其  
其聲也其風也其氣也其風也其氣也其

右書教顯典

享保十二戊申四月十二日

廿一日

所至之處多為風中有人之迹  
其由吸由風中吹來之氣也其地之氣亦  
一於中其方也其聲也其風也其氣也其  
其聲也其風也其氣也其風也其氣也其

右書教顯典

享保十二戊申四月十二日



一 明方官存  
所據事 自所入 毋人 民亦 入 品 若 合  
是又 何 務 考 厥 多 何 務

一 昨廿日

三 乃 極 淡 日 光 甚 盛  
還 沛 日 分 今 廿 日 既 乃  
也 乃 乃 乃 乃 乃

人 在 事 事 乃 乃

京 保 十 二 戊 申 年 四 月 廿 日

一 廿 日 還 沛 之 節  
沛 月 之 三 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
千 居 而 乃 乃 乃 乃 乃

一 由 漢 代 之 節  
沛 月 之 三 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
極 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

但 若 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

四 月

中 書 乃 乃

右 乃 乃

京 保 十 二 戊 申 年 四 月 廿 日

光

一 今 日 還 沛 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃



宣和元年十一月十五日  
宣和元年十一月十五日  
宣和元年十一月十五日

四月

宣和元年

宣和元年十一月十五日

田持

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

四月

宣和元年

宣和元年

四月

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年

宣和元年



享保十三年四月

一町ノ新親ノ致シ候事ハ、御外様ノ御見立ノ御多ク有之  
候事ニ付、自由ノ御早ニ廣ク申上、御座、有之  
右ノ御座、御早ニ御申上、御座、有之

四月

享保十三年四月

一由、御座、別、御座、御早ニ御申上、御座、有之  
御早ニ御申上、御座、有之、御早ニ御申上、御座、有之  
御早ニ御申上、御座、有之、御早ニ御申上、御座、有之

四月

享保十三年四月

日光、御早ニ御申上、御座、有之、御早ニ御申上、御座、有之  
日光、御早ニ御申上、御座、有之、御早ニ御申上、御座、有之

四月

享保十三年四月

由、御早ニ御申上、御座、有之

諸、御早ニ御申上、御座、有之

一、御早ニ御申上、御座、有之



敬告之書

勸業中川集

右明後之書  
上平下之書

四月

左大政令

享保十三年四月

謹

一今及當者中平日之事  
君要之書

大和之可下

一於此中

相傳

一

一

一

一

貴之

右之

享保十三年四月



左史成之

享保十二戊申年四月

市岡有仁

一日先帝崩御中 急召養子有之り帝 御書之宣致在  
お多任務を承継せしむる各書入格可致致  
左史書身也

享保十二戊申年四月

来月十二日日光山 佛の如く同廿一日 還清之

時

佛月見送

佛蓮の如く佛蓮の元信を宣致有

佛

衣中より出

佛の如く相傳へ

佛殿より出

還清之帝

入佛の如く

佛殿より出

一佛殿

還清之帝の如く佛殿より出

為用事

右の如く可なり

左史書身也

享保十二戊申年四月

伊豫守殿



[illegible]

右書畫部

京保三月申年五月十七日

一 日光山金胎院之圖  
傳法心者直金胎院之  
大發心者直法苑珠林  
一 山金胎院之圖  
傳法心者直金胎院之  
大發心者直法苑珠林

五月七日

李太僕

享保十二戊申年八月八日辛卯九日庚辰照原由安



享保十二戊申

今宵月光 月は東の山より出づる如く  
所はるるに月あり 月有る方由るに  
布衣の山は人なり 月有る方由るに  
少くとも儒者賢人なり 月有る方由るに  
冬 月有る方由るに

但し月有る方由るに 月有る方由るに  
月有る方由るに 月有る方由るに  
月有る方由るに 月有る方由るに

右の月有る方由るに 月有る方由るに

一 月有る方由るに 月有る方由るに

月有る方由るに 月有る方由るに

月有る方由るに 月有る方由るに

月有る方由るに

月有る方由るに

享保十二戊申 月有る方由るに

月有る方由るに 月有る方由るに  
月有る方由るに 月有る方由るに

月有る方由るに 月有る方由るに



右大臣

享保十二戊申年六月十六日

貴月日光所照之席氣香臭出在面之如方  
而書帳之仕事其六月申之三日書帳之如方  
諸般米屋亦多此席乃其為如之如之  
可也

右大臣

弘治元年三月廿六日



教令類纂卷三集六

日光所屬寺僧尼約

自明和又辛  
至安永又辛



仍本入庚子年十月

通年之同日光

而社奉之文經書水

修心退而亦法定之候永

仰出以寺

出仕寺之寺一丹以寺之寺也候中上之及以

本之通令中上之寺達以

十月

本之明集保







何しやうと仰る

四月十七日

東京市会

新大塚部

右令係保

○  
四月十七日 四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日 四月十七日

四月十七日

四月十七日

四月十七日



日光山御社奉用白紙奉 享保十三申年一書之紙以  
取相之紙一紙建高右通の監殿書後之度紙一紙酒の信し  
中進出上

四月九日

新衣綴部

東京五三番

船頭出相

先年日光御成之書高右通の記之書出高右通の建高右  
通の監殿書後之度紙一紙酒の信し 御博  
物之方近之書高右通の記之書出高右通の建高右

四月九日

概之各

右御書付家

明治己丑年四月

安慶彈正少弼

伴家傳前名

過 傳之郎

日光山

御社奉用白紙奉 享保十三申年一書之紙以

御社奉用白紙奉 享保十三申年一書之紙以

御社奉用白紙奉 享保十三申年一書之紙以

右御書付家



御世集の用紙 後集の用紙 未だ一省通達也

己月

右大成令後集

明和六己丑年己月

光孝日老心

大目録  
凡目録

御成金言話向の御方よりす由に御成金言話は  
恒而此に及るなり

己月十二日

右明集録

明和六己丑年己月

日光心

御世集の用紙 後集の用紙 未だ一省通達也  
下り成金言話向の御方よりす由に御成金言話は

己月

右大成令後集

明和六己丑年己月

日光心

日光心



御社系之川内道中 方以緒の方其の合共退之て取れぬ  
 但御系より紀而の川内道中へ取れぬ  
 享保十二年に格を以て南河内縣令に任ぜられし  
 右明集録

明治己丑年五月

日光

御社系計の御社系系為書之由て石連の人数之定

一拾万石以上

譜 又 十  
 池 七 格 中

一又万石以上

一又万石以上  
 右通之取れぬ以上

弓 三 格 張  
 池 池 石 挺  
 馬上に格張  
 譜 又 十  
 池 六 格 中  
 弓 或 格 張  
 池 池 半 挺  
 弓 上 二 格 張



昭和二十七年八月

日光

門外松平作樂の爲に紙を借し又其の爲に松平作樂の爲に紙を借し又其の爲に松平作樂の爲に紙を借し

八月

昭和二十七年八月

松平作樂の爲に紙を借し又其の爲に松平作樂の爲に紙を借し又其の爲に松平作樂の爲に紙を借し

日光  
門外松平作樂の爲に紙を借し又其の爲に松平作樂の爲に紙を借し又其の爲に松平作樂の爲に紙を借し

昭和二十七年八月



御免なり

彼地

同慶寺

杉木寺

酒井寺

大徳寺

同慶寺

大徳寺

同慶寺

同慶寺

同慶寺

同慶寺

同慶寺

同慶寺

同慶寺

同慶寺

八月

同慶寺

同慶寺

同慶寺



女  
彈心少弱

停筆值氣寫

山本士心齋

大邑之水

高平公之書

新食錄

过  
原  
心  
印

庚午四月四日

門任系一書

所願諸君保重身體以復舊觀此中切切  
問候

用一事以爲一

明末己丑年五月

日光山信長屋

門徒来と云門可之云之云云門可之云云  
佐所之云入

門徒之門藏端之

思云小孫  
所成則  
所成則  
所成則  
所成則

石大令集

明和己丑年六月十六日



此月対に

孝保十二申年 日光

河社系と帝何々何々金言何々何々  
孝保十二申年 日光  
河社系と帝何々何々金言何々何々  
孝保十二申年 日光  
河社系と帝何々何々金言何々何々  
孝保十二申年 日光

六月

右に明集録

明本云七申年六月

歩行田作

小姓組

新道行ある組

長谷川正江郎

小林 十右衛門

橋本 玄文郎

永井 貞徳

酒造 保三郎

橋井 大右衛門

秋田 平次



新田信房之丞

大田市書信

大田市書信

大田市書信

大田市書信

中根 外記

安房 又之丞

松平三郎以郎

御書院主

西川龍孝之丞

松平公儀進

大田 又之丞

井上 又之丞

大田市書信

大田市書信

大田市書信

大田市書信

大田市書信

大田市書信

大田市書信



令獨於書

七波流略

范村金所之書

羽倉江左藩

中西衣服

壬戌年四月

師社衆之衆 師城 還師大木歩行休六日氣一息一息  
 以行倒一門場中一校出之乃知也

以行倒一四場可一收此為一了此

右書付申付物之度に取付

乙卯

木令條羅

康熙庚午年二月十一日松平右近將監殿也此物為殿中寶

斗庵奉 四月 日 老正 御社奉 弘治 四月 日 詔 与 御歌 所 及 其

新祝儀をなす方々をとおひのり若狭の新聞を

志見今王世貞

但揆已心之弊新親之古酒之清乃其未有東風

厚之乃命之曰

七

衣  
法書  
成  
反

本之類也。在右邊。乃楚風也。何了。故以作。夜。信。



戸主

冊

水主

茶主

入月

稻主

明治七年五月廿二日

日光市佐野村

一、二百石

佐野村

人教

一、二百石

佐野村

人教

一、二百石

佐野村

人教

一、二百石

佐野村

人教

一、二百石

一、二百石

一、二百石

又月

〇——日光

日光市佐野村



一 衣履沙綾綿細よりしとお金用并流着意小者中が衣  
小常の流着し通称の情しうは事

但舊純子綿環縐子に類し金用し事

一 武分より武意に類し紋有来よりし事

一 武分より金と虎に用し紋も金用し事

一 襦袢は襦袢<sup>襦袢</sup>紗天鵝絨毛革金用<sup>襦袢</sup>紗柳枝縐

も從う襦袢より有金と金とふ事

但る襦袢<sup>襦袢</sup>外より金用し縐らも金とふ

不苦事

一 金用より縐固より縐縐<sup>縐</sup>に金用し事

一 襦袢より縐より相地の用し事  
縐金用より事

右書面に通じしを縐縐<sup>縐</sup>は事

又月

八月十六日松平右通の遺服の情

一 縐内所<sup>縐</sup>縐<sup>縐</sup>不并<sup>縐</sup>内所<sup>縐</sup>傳端<sup>縐</sup>

流着し事

一 縐より不并<sup>縐</sup>に類し金用し縐より不并<sup>縐</sup>に類し事

お通し事



河内城の家の中より河内府に書したる文書  
新銀座の店に書したる文書  
東の家の店に書したる文書

一河内府の店に書したる文書  
一河内府の店に書したる文書

一河内府の店に書したる文書  
一河内府の店に書したる文書  
一河内府の店に書したる文書

八月

右の月集録

河内七原 定年八月

大同分  
八月分

諸組役の職に就いたる者  
いふは月分と云ふ事

但し此の下の月分と云ふは今の御中事

河内府

河内府

河内府

河内府

河内府



以諸地分

以諸地

以納戶

以細物

以諸地

以具是

以幕

以諸地

以細

以細

所馬

以諸地

以諸地

以諸地

右之經

右大成令後集

明永七廣定年十月十八日

事

御社







後白の御成敗は長年蒙る人食ふ所なりと云ふ事  
また歌家御事 下付

十二月

本之録に永和録

古之明集録

明和八年卯年二月

此書は

一白老所伝の而して切實なる事は一國の明和八年卯年  
涉信所伝の而して切實なる事は一國の明和八年卯年

一有る事

但書一門記の傳る事

右肝黄の事

後

一門記の傳る事

一門記の傳る事

後

明和八年卯年二月七日

此書は

其事は月日見ゆ事



あつとてふ所は、何れより、又、年々、平林村の傍り、右邊、  
ふ、又、龍見、光、年、後、所、新、お、後、い、ふ、一、き、け、後、も、お、後、未  
右、林、村、方、に、た、て、る、其、の、所、に、一、つ、あ、る、所、に、お、後、い、ふ、  
日、の、間、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、

二月

右、令、條、條、

花

明治八年卯年二月廿七日、平林村、近、の、所、に、お、後、い、ふ、  
其、年、は、月、日、光、の、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、  
其、人、は、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、

い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、

二月

右、令、條、條、

右、令、條、條、

明治八年卯年、平林村、近、の、所、に、お、後、い、ふ、

其、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、  
其、人、は、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、  
其、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、所、に、お、後、い、ふ、



今更に書一或は此は後世に於て信ぜられし所  
かゆを思ひて腹留く情を後子に傳へたるもの  
この事いふに事あるは先年にも既に信ぜられし  
のねに於て書

本に録するに意ある

二月

本に内集録

口より見

何れにも事ありて人をよきとあて二言をよむに  
人より成りて事ありて人をよきとあて二言をよむに

より近らぬ事と信ぜられし事

二言をよむに事ありて人をよきとあて二言をよむに  
ともまた此の人の教を信ぜられし事  
又事ありて人をよきとあて二言をよむに  
より近らぬ事と信ぜられし事

二言をよむに事ありて人をよきとあて二言をよむに  
より近らぬ事と信ぜられし事

二月

本に内集録  
より近らぬ事と信ぜられし事



二月十七日 平右衛門 豊後守 中務卿 藤原 朝臣

本年四月 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

前日 進上 和歌 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

二日

二月十七日 平右衛門 豊後守 中務卿 藤原 朝臣

此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣  
此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣  
此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣  
此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

二月十八日 平右衛門 豊後守 中務卿 藤原 朝臣

此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣  
此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣  
此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣  
此 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣 日光山 住持 西行法師 分書 一紙 山内 藤原 朝臣

二月十八日



水竹要人

東京 吾々情

右御書付寫

明治八年 卯年 九月 廿七日

板倉依藤子殿  
此書は御書付寫

東原年一日元

御社奉祀延引張 信司郎元子年一〇月御社奉祀延引張の御書付寫  
此御書付寫を奉 初書より御書付寫を奉 御書付寫を奉 御書付寫を奉  
一水竹要人

九月

右御書付寫

安永三 甲午年 七月

日光御社奉祀延引張の御書付寫を奉 御書付寫を奉 御書付寫を奉  
此御書付寫を奉 御書付寫を奉 御書付寫を奉 御書付寫を奉  
御書付寫を奉 御書付寫を奉 御書付寫を奉 御書付寫を奉

七月 廿七日

水竹要人

右御書付寫

安永三 乙未年 二月 廿七日



書簡之類

日光社集、後集、（以下略） 日光社集

右、通、（以下略）

二月

右、天、内、集、錄

右、永、仁、乙、未、年、二、月、初、日  
（以下略）

申、申、二、月、初、日

河、社、集、乙、未、年、二、月、初、日  
（以下略）

右、永、仁、乙、未、年、二、月、初、日

一、西、元、乙、未、年、二、月、初、日  
（以下略）

一、和、平、初、年、二、月、初、日  
（以下略）

右、國、主、毫、一、年、二、月、初、日  
（以下略）

右、乙、未、年、二、月、初、日

未、仁、二、月、初、日

右、天、内、集、錄

安、永、仁、乙、未、年、二、月、初、日

未、申、二、月、初、日  
（以下略）



二月

○安永己乙未年己月十六日

二月十六日

不食肉

あまのつとめ

通  
恒

右合條錄

安永己未年五月朔日

水月軒

一、申年己月日光心社奉月所依新初易一而

月夜に  
先達と  
建ちあ  
ひて  
蔵  
に  
入  
る

本刻合卷一之終一紙  
藏一市面  
作書

一、石部子たれし~~て~~  
て

一、<sup>藏</sup>~~藏~~書方、後を以て大同村の同村に之を合ふ

木之領下



右三明集錄

安永己未年六月五日

江國志

本年申年日老所往來之書所伏其間可也而道中  
 有因收之故失隨不手快也今收之向瑞山列在張新  
 成藏由我懷箱來之人也其書前為一函實之其人持之而回  
 名冊分之處得小一函讀之知其在保康之云云又云  
 之餘也訪焉亦在感山柱下之收之在否然不知何人持之

由之天竺等處取此一統帝古之鎮以建英人食之較強云

相尚月中之聖告傳以言安度深平也臨江  
時人多書付二張各九

衣之類てとあるは、向陽衣なる類、其の概合し、故に備け有  
 得、衣類に形合は、是又と云ふ也

六月

安永四乙未年六月廿五日

司馬殿山

大岡政に

日光御社より信長へ  
分ハ張子へ張子へ







之類てわろき沙達月條之事、尚ほ人知るべき事なり、  
日之知るべき事、後高き事、人知るべき事、  
由事、下口なり

六月

右之類、下口なり

右大衆、今後集

安永元乙未年九月十二日

大目付に  
休目付に

右之類、沙達月條に、日之知るべき事、  
右之類、沙達月條に、日之知るべき事、

途中、沙達月條に、日之知るべき事、  
途中、沙達月條に、日之知るべき事、  
途中、沙達月條に、日之知るべき事、

九月十二日

右令條、源

安永元乙未年九月

右之類、沙達月條に、日之知るべき事、  
右之類、沙達月條に、日之知るべき事、  
右之類、沙達月條に、日之知るべき事、



九月

安永己未年九月九日

一專心申年一日完

御社系三尊外如痛早りと切場本并所及節所をさしとて  
 とるより何事なり組より何事なり地割はお早くとるそと  
 なることあるそと今とて下とてしとるものと

正心志

水竹居人

九月九日

河東志序

未之明集錄

安永己未年九月

一  
東  
中  
年  
日  
光

御社奉有外曲帰早々切場訓弄少及爲る是より今可なり  
 故より口公所奉多増割土也早々此等之長所是等之長より  
 以事より下より大國分は國分より建すは此等の事なり  
 下より建す

九月

安永元乙未年十一月廿四日











安永己未年閏十二月十六日

庚申年 日光

[illegible]



可成

和通ては相傳

至十二月九日

右憲教教典

安永又申年一月廿五日

此目付

一日光氏依し而て及中此様方より候に及る様を以て而て二月廿五日  
此用候此即定候に及る様列に及る中候に及る様を以て而て二月廿五日  
此目付と申す候に及る様

一層細古の字に及る様を以て而て二月廿五日此即定候に及る様列

に及る様を以て而て二月廿五日此即定候に及る様列

友より申す候に及る様

和通に及る様を以て而て二月廿五日此即定候に及る様列

て及る様

○和通に及る様を以て而て二月廿五日此即定候に及る様列

安永又申年一月廿五日

此目付

日光氏依し而て及中此様方より候に及る様を以て而て二月廿五日



衣大成令後集

安永又丙申年正月廿六日申刻歿

大同行記

日光所依之

高家站

布衣上石詩

和志内井七日麻子下志用何時登  
城之山後之山也

पुस्तकालय

求令條保

安永乙酉申年二月九日

古之遺教  
出明之厥

西園題記

[illegible]



一武之方一季其志云人而三月とし推ふたう人徳の深きは今迄  
 し及ぶるに及ばずはなし無き事なりとて唯可成ふに及ばず  
 なる人なり唯其の徳は自ら及ぶ所なり其の徳は自ら及ぶ所  
 若くは自ら及ぶ所なり其の徳は自ら及ぶ所なり其の徳は自ら  
 及ぶ所なり其の徳は自ら及ぶ所なり其の徳は自ら及ぶ所なり  
 申正月

安永六丙申年 正月廿七日

太右衛門左衛門

和通とて和通とて和通とて和通とて和通とて和通とて和通とて

言家

山書院書院

山書院書院

大同 年

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院

山書院書院



以諸絶方

以諸絶方

小方人氏

拂方以絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方

以諸絶方



安永又丙申年正月廿七日

大目付

一々日金銀の事衣の事雪の事分所目録  
佐竹山官の付也 楠下山官の事

正月廿七日



